

## 大切なのは今、ここ。

取材・文／服部洋一 東日本国際大学講師

### ◆風変わりな町、体当たりのケア

山谷という町がある。台東区と荒川区の境目に位置するこの町の名は地図にはない。南千住の駅から汨橋交差点を越えてのぞむさびれた一角が、昭和のある時期、1万数千人もの日雇い労働者の熱気で沸きかえったことを想像することは難しい。

1964年の東京オリンピックを頂点として高度成長期が終焉を迎えると、彼らの働き口は急速に失われていった。祭りの喧騒が退潮し、多くの者がこの町を去るなかで、残ることを選んだ人々、残らざるを得なかった人々もいた。

現在山谷で暮らす日雇い労働者、あるいは元日雇い労働者の数は、およそ3500人。その平均年齢は65歳前後といわれている。彼らのほとんどは、生活保護を受けながら一泊2000円ほどの「ドヤ」と呼ばれる簡易宿泊所に暮らすか、ホームレスとして路上生活を送っている。

2002年の秋、山谷に「きぼうのいえ」という一軒のホスピスが建った。風変わりな町に建つこのホスピスで繰り広げられる体当たりのケアが、最近注目を集めている。きぼうのいえは病院ではない。制度上の位置づけは「宿所」。21戸の居室はすべて個室で、テレビ、ビデオ、エアコン、冷蔵庫までついている。

山本美恵さん



散歩の大好きな入居者のNさん。毎日の日課だ。

施設長の山本雅基さんと、看護師資格を持つ美恵さん夫妻が、きぼうのいえの顔だ。2人は、理念を熱く語るお父さん役と、入居者のお世話の最前線で奮闘するお母さん役を上手に分担している。

### ◆入居者とスタッフとの愛

取材当時、きぼうのいえではAさんという50代の男性が息を引き取ろうとしていた。Aさんの病氣は喉頭がん。病変によって首には直径7～8cm大の穴があき、その下にある気管孔から呼吸をしている。病変がさらに広がり動脈に達した時、彼は数秒でこの世を去ることになるという。

Aさんを支えるのは、スタッフのNさんだ。Nさんは、都内でも屈指の病院で看護師として勤務した経験がある。しかし、その経験だけを買われて厳しい容態のAさんの担当を押しつけられたわけではない。

Aさんは日本酒が大の好物。胃ろうから一升を5分で流し込むと、ひっくり返って失禁する。しゃべることのできないAさんは、身振り手振りと思議な文字だけが、コミュニケーションの手段だった。しかし、アルコールのせいなのか、病氣のせいなのか、はたまた元来の性分なのか、スタッフを見ると子犬のようにふざけてじゃれついてくる。意思疎通は容易ではなかった。

山本雅基さん



必要な栄養を摂らないAさんの傷はどんどん大きくなる。百戦錬磨のスタッフも「困ったなあ、どうしたものかなあ」とさすがに頭を抱えるなかで、「この人、面白い!」と思っ

たのが、Nさんだった。「それからNさんは、彼とほんとお友達になっていったんですね。2人の間に、人間対人間の愛が芽生えたんです」、そう美恵さんは語る。

Aさんは生まれ変わった。あれほど好きだった酒を、びたりと止めた。懸命にNさんとのコミュニケーションを試み、2人で一緒に自転車上で野や秋葉原に出かけた。

#### ◆愛情を食べて生きる仙人

年が暮れるころから、Aさんの容態は急速に悪化した。肺炎や出血をくり返し、「今夜あたりがヤマだ」という状態に何度も陥った。

Nさんは、Aさんにつきっきりになった。スタッフが話しあい、Nさんを専任担当者に決めた。Nさんは以後、泊まり込みの看病を始めた。スタッフの人手がある日中に自宅に戻る。風呂に入り、着替え、ご主人とご飯を食べると、またきぼうのいえに戻ってくる。

ある時、ボランティアの一人が「すべての人に平等に愛を与えることが大事なよ」とNさんを諭した。Nさんは「そうなのか、私は修行が足りないんだ」と落ち込んだが、すぐに、そうじゃない、と思い直した。「不平等、大いに結構、と私も思っています。すべての人を愛するっていうのは神様の愛。まずは、1人の

人をきっちりと愛することが大事なんじゃないでしょうか。1人のことを愛し抜くこともできないのに、すべての人を愛することなんてできるんでしょうか」と美恵さんは言う。

仙人のように骨と皮だけになったAさんは、普通ならばもう亡くなって当然の状態だ。それでも懸命に生きています。

「Aさんは、Nさんの愛情を食べて生きてるんでしょう」と雅基さんは語る。

#### ◆スライムのような組織

「病院で言われる『平等に愛しなさい』っていうのは、形だけの、ものすごく希薄な関係だと思う」と雅基さんは言う。

きぼうのいえでは、入居者とスタッフの間で丁々発止のやりとりが繰り広げられる。相手の生き様に対して、ある場合は肯定し、ある場合は物言いをつける。それを21人分やり遂げることが、本当の意味ですべての人に関わることだと雅基さんは考えている。

きぼうのいえでは、入居者との接し方を各スタッフに委ねている。「相性はどうしてもあります」と美恵さん。その一方で、AさんとNさんのようなケースでは、残りのスタッフが協力してフォローしあう。ボランティアの力も積極的に活用する。「組織の形を保つために状況をはめ込んでいくようなやり方は、うちではしません。状況のほうを優先させて、組織をスライムのように変形させるんです」と雅基さんは言う。「毎

水曜日は、人が足りないんですが、どうしましょう?」って言われれば、「じゃあ、いい人が来るようお祈りしておきます。それまでみなさんがんばってください」って答えます。みんな、ひっくり返って笑っていますよ、「また出たよ」って。

そう言いながら美恵さんも笑う。

#### ◆自分のために、やっている

きぼうのいえで入居者から感謝されることは珍しい。特に入居したばかりの人からお礼を言われることは皆無と言っていい。

「ただそれは、その人に責任があるというよりも、生きてきた環境のせいだと思うんです。何かされたらその人に感謝をするんだ、ということ、学ぶ機会が与えられてこなかった人たちなんです。だからこそ、愛を示し続けること、愛の提示の意味を身をもって伝えることが大切なんです」と雅基さんは言う。

美恵さんの視点はちょっと違う。彼女は、相手から感謝されるかどうかということをはほとんど気にしないようだ。「だって、自分のためにやってるんですから。自分が放っておけないと思うから、手を出すんです」。

美恵さんは、病院勤務の後、出版社で看護学生向けの雑誌を作ったこともある。「こういうのを作りたい」「ここのところをもっと良くしたい」という思いで、時間が経つのも忘れて作業に夢中になる姿を見て、上司は「君は仕事を趣味でやってるね」と言った。「今も一緒に、自分がこう生きたい、こうしたい、と思うから、その通りにしているだけです。毎日がとても充実していて、楽しくって」と、美恵さんはまた笑う。

#### ◆手を叩かれたら「いい平手だな」

しかし中には、差し伸べた手にお礼を言わないばかりか、その手をぱん、と叩いてくる人がいる。そうすることでしか、人と関わりを持ってない人がいる。そんな時にはやはりつらいし、がっかりする。それでも、うまく受け止めるためのポイント



認知症があり耳が不自由、言葉が話せない、字は読めるが書けないBさんとのコミュニケーションは困難をきわめた。諦めないで根気よく……。Bさんの言いたいことがわかったときは抱き合っただ喜び。でもわかってあげられないことが多かった。

は、ユーモアだと雅基さんは語る。

雅基さんは唐突に、テーブルのお盆に盛られたお菓子をひとつ取り上げた。両手で包むようにして胸の前の空間に支え、「これ、手を離すとどうなりますか?」と聞く。そりゃ落ちるでしょう、と言う筆者の目の前で、雅基さんはひょい、とお菓子を頭の上ののせてみせた。

「ね、落ちません。みんな手の場所が変わらないだろう、って思っちゃう。でも、投げるかもしれないし、誰かに渡すかもしれない。見方を柔軟にずらすことが大切なんです」。

差し伸べた手を叩かれたら、「なかなかいい平手だな」と楽しめばいい。「『お菓飲んだよね?』って聞いたなら、『製菓会社の回し者だろう』って勤められる。でも、怒る代わりに、『そんなふうを考えるなんて、面白い!』って思えるかどうかです」と雅基さん。入居したばかりの方から、「俺の臓器を取って、フィリピンに売るつもりだな」と疑われたら、「売れるぐらい丈夫な臓器だといひね」と笑って返す。

しなやかな受け流し方は、美恵さんから学んだところも大きい。「『殴るぞ!』って言われたら、僕は『なんだと、人に向かってそんなこと!』って返していました。そうすると、だんだんお互い気も高ぶってくる。でも美恵さんは、『やだあ、叩いたら痛い、やめてえ』って、うまく流しちゃうんです」。

ほきっ、と折れるのは止めた。すると、ストレスもなくなった。

#### ◆看護師資格は招待券

看護学生だった頃の自分にもし声を届けられるとしたら、どんなメッセージを伝えますか?

「すべて、なるようになります」。しばらく考えてから美恵さんは答えた。大事なのは、何事も全力で経験すること。悲しみ、喜び、憎しみ、愛し愛されることを、精いっぱい感じること。「たとえ中途半端でも、『ああ、自分は中途半端でダメだ』ってはっきり認識すれば、ひとつの大事な経験になるんですよ」と美恵さ



入居者とスタッフがお花見などのイベントに連れだって行くこともある。

んは言う。「看護師資格はゴールじゃないんです」と雅基さんが付け加えた。資格は真に人間的なものを学ぶことができる場所への招待券。本当の学びは招かれた先で始まる、そう雅基さんは考えている。

だが、病院に入ること叩き込まれる「組織の側から見て『正しいこと』」には注意が必要だ。組織に属せば意に反してルールに従わざるを得ないこともある。そんな時にも「おかしい」と思う気持ちを忘れないでほしい、と美恵さんは訴える。「ホスピスに関わる人は、最初からホスピスをめざすのではないんです。外科をやり、内科をやり、救急をやり、いろんな疑問に突き動かされて、最後にホスピスにたどりつく。そのホスピスにも疑問を持って、また新しい活動を始める人もいます。ストレスは人生のバネになるんです」と雅基さんは言う。

#### ◆山谷を丸ごと、ホスピスに

山本さん夫妻は2006年3月、訪問ヘルパー事業を開始した。きぼうのいえの定員は21人、隣でほぼ同じ機能を提供する「なかよしハウス」を含めても32人しか見られない。一方、山谷には3500人の「おじさん」や「おばさん」がいる。単純計算で100以上の施設が必要だが、それは不可能だ。

せめて介護だけでも提供したい。訪問ヘルパーにきぼうのいえの理念と技術をよく理解してもらって、各ドヤに落下傘部隊のように送り出せば、山谷が丸ごと、巨大なホスピスになるのではないか。壮大な挑戦が始まっている。

メディアで取り上げられる機会も増え、きぼうのいえの活動は全国的にも知られつつある。しかし、当の雅基さん、美恵さんには気負いはまったくない。

「子どももないし、『自分たちがいなくなったら、どうなるんだろう』って、ふと考えることもあります。でも、時代も、この町も変わっていきます。物好きな人がまた出てくるかもしれない。何も心配はしていません」と、美恵さん。

きぼうのいえで何より大切なのは、「今」であり、「ここ」なのだ。

写真提供：浅田悠樹

#### 服部洋一(はっとり・よういち)

東日本国際大学講師、社会福祉士。1974年広島生まれ。東京大学大学院総合文化研究科を経て、現在はソーシャルワークと文化人類学の観点からヘルスケア領域の研究を進めている。主著に「患者の声を医療に生かす」(共編著、医学書院)、「米国ホスピスのすべて」(ミネルヴァ書房)。

